

## 首里城復興基本計画策定に向けた施策の方向性の論点

	基本施策	施策展開	これまでの懇談会等における委員の主な意見	施策の方向性	議論の焦点
1	正殿等の早期復元と復元過程の公開	(1) 伝統技術を活用した施設整備		① 首里城の復元・修復を支える人づくり	<p>●復元及び将来の修復に携わる伝統的技術を有する人材の確保・人づくりに関する県の取組はどうあるべきか。 (国が実施する首里城城郭内施設の復元等への県関与のあり方について)</p> <p>●復元を「観る」、また、今回の機会を捉え、首里城を中心とした沖縄の文化・歴史を「学ぶ、楽しむ」ことに関する県の取組はどうあるべきか。 (県営公園の有効活用、最新技術の活用、学校、大学等高等教育・研究機関や歴史・文化団体等との協働のあり方など)</p>
		(2) 木材、瓦等の調達に向けた取組		<p>① 県産木材の調達</p> <p>② 首里城赤瓦についての調査研究</p> <p>③ 県民をはじめ県内外から寄せられた思いを形にする取組</p>	
		(3) 復元過程の公開による観光資源等としての活用	◆ 復元の状況を含め、公開（見学）する箇所を増やして行く必要がある。	<p>① 正殿の復元過程を観る、学ぶ、楽しむ</p> <p>② 首里城公園内の新型コロナウイルス感染症対策</p>	
2	火災の原因究明及び防火設備・施設管理体制の強化	(1) 再発防止に向けた防火設備等の強化		<p>① 想定される様々な出火要因の分析等</p> <p>② 首里城公園における防火対策の実施</p>	<p>●国、県及び指定管理者の三者が関係する防火等災害対応のあり方に関し、県の取組はどうあるべきか。 ※首里城火災に係る再発防止検討委員や国の技術検討委員会において防火等災害対応のあり方について検討中。</p>
		(2) 安全性の高い施設管理体制の構築		<p>① 首里城火災に係る再発防止策の策定</p> <p>② 国等と連携した施設管理体制の構築</p>	
3	首里城公園のさらなる魅力の向上	(1) 国営・県営区域の一体的利用	<p>◆国・県営の首里城公園及び首里地区が、沖縄振興（まちづくり・産業・観光等）の資源として十二分に活用できる体制づくりが必要。</p> <p>◆国では、首里城城郭内に保管されていた重要文化財を城郭外で保管する議論がある。その受け皿を中城御殿が挙げられるが、県の専門員会設置・検討など国のスケジュールとリンクが必要。</p> <p>◆御茶屋御殿、円覚寺をどう位置づけ、どう整備していくをするか明確にすべきである。</p> <p>◆首里城一点集中型ではなく、魅力資源を面として捉えた整備をし、回遊させる形が望ましい。</p>	<p>① 首里城公園全体の魅力向上</p> <p>② 中城御殿の整備と展示・収蔵機能の拡充</p>	<p>●国営及び県営を一体に捉えた首里城公園のあり方に関し、県の取組はどうあるべきか。</p> <p>●焼失により改めて首里城への注目が増す中、基本施策1「復元過程の公開」と関連し、「観る、学ぶ、楽しむ」場としての首里城公園の魅力向上に必要な県の取組はどうあるべきか。 (ユニバーサルデザインの視点、最新技術の活用等)</p>
		(2) 多様で柔軟な施設の利活用		① 首里城公園における多様な行催事等の推進	

## 首里城復興基本計画策定に向けた施策の方向性の論点

	基本施策	施策展開	これまでの懇談会等における委員の主な意見	施策の方向性	議論の焦点
4	文化財等の保全、復元、収集	(1) 首里城跡の適正な保全と価値の周知	<p>◆ 遺構の復元などの際には、世界文化遺産登録の意義も踏まえ、遺跡の真実性を重視した。この考えを踏まえた整備が必要。遺構以外のものも復元したものと共存が必要。</p> <p>◆ 開発に伴い今後も遺跡の発見が想定されるが、それらを共存させながら活用することが課題。</p> <p>◆ 首里城以外にも首里の歴史を語る資産はたくさんある。</p>	<p>① 正殿遺構の適切な保護及び公開</p> <p>② 周辺文化財の情報発信</p>	<p>● 焼失又は被災した文化財及び美術工芸品等の収蔵品の復元及び修復に関し、県の取組はどうあるべきか。</p> <p>(焼失等した収蔵品は、県等が出損した基金等を活用して美ら島財団が収集されたものであり、一義的に財団が復元を担うもの)</p> <p>● 今般の焼失等した文化財等と含めた修繕等のあり方に関する県の取組はどうあるべきか。</p>
		(2) 文化財等の復元、修復及び収集	<p>◆ 伝統工芸は範囲が広く、王朝時代の技術継承は、職人の育成がポイント。</p> <p>◆ 県外に流出した工芸品のリストアップが重要。</p> <p>◆ 今後、首里城ができるまでの間に博美などで琉球王朝に関するものについて年1回の開催や、県外の琉球の工芸品を保管している美術館等に依頼し、公開してもらってはどうか。琉球王国時代の素晴らしい伝統技術を各地で発信することにもなるし、それを見ることによって職人も意欲をかき立てられ、技術継承につながる。</p>	<p>① 被災した文化財等の修復、復元に対する支援</p> <p>② 琉球王国時代の文化財等の調査研究、資料収集</p>	
5	伝統技術の活用と継承	(1) 伝統的な建築技術の活用と継承		① 伝統的な建築技術の活用と継承	● 美術工芸品を含む文化財等の承継に関し、県の取組はどうあるべきか。
		(2) 美術工芸における伝統技術の継承	<p>◆ 文化財の修復に関しては、県立芸大への意見聴取や修復技術・保存に関する科学的な取組についても議論する必要がある。</p> <p>◆ 首里城が復元されるまでという視点で技術者の育成を考えた時には、新人を育てるというよりも、すでにいる従事者に特化していかないと継承は難しいのではないか。</p>	<p>① 模造復元事業の継続による技術者の育成等</p> <p>② 伝統技術に関する教育の推進</p> <p>③ 伝承者養成に向けた支援</p>	

## 首里城復興基本計画策定に向けた施策の方向性の論点

	基本施策	施策展開	これまでの懇談会等における委員の主な意見	施策の方向性	議論の焦点
6	「新・首里杜構想」による歴史まちづくりの推進	(1) 歴史を体現できる風格ある都市空間の創出	<p>◆文化財の復元やまちづくり等は、期間や目標を設定しながら取り組んでいくことが重要。</p> <p>◆回遊性を高めると観光客が不規則に様々な場所に行くようになり、住民の生活への負荷も高まる。住民がどのような形で意思決定の場に参画し続けられるか、体制づくりが必要。</p> <p>◆これまでの首里杜構想の進捗整理について、当時がない考え方が増えている。新しい理念の下で整備のあり方の検討が必要。</p> <p>◆連携体制は計画期間だけでなく、今後も続き、自走するものであるべき。計画期間においては、そのような体制を構築することが重要であり、教育機関も含めた連携体制が必要。</p> <p>◆連携体制は、有識者が突出する形ではない方が良い。NPOや専門家集団も含めた「団体等」を追加すべき。</p> <p>◆大学、住民、事業者も含めて継続的に議論できる場が必要。</p> <p>◆那覇市と協働した取組が必要であり、歴まち法など、様々な支援補助も含めた財源が必要。</p> <p>◆首里杜地区の住民が、50年後の首里のまちを見据えた「首里まちづくり憲章（仮）」を提起する予定。まちづくりとともに観光、交通などの課題解決に取り組み、成功すれば全島のモデルにもなると期待している。50年後の首里のあるべき姿の実現に向けて、住民も一緒に動いていきたい。</p>	<p>①「新・首里杜構想」の策定と着実な取組</p> <p>②推進体制の構築・充実・強化</p> <p>③歴史や文化を感じる景観まちづくりの推進</p>	<p>●歴史を体現できる風格ある都市空間の創出に向けた関係機関・団体等の連携体制及び県の取組はどうあるべきか。</p>
		(2) 首里城公園及び周辺地域の段階的整備	<p>◆基本計画に琉球王朝時代の様々な施設等の復元について盛り込んで欲しい。</p> <p>◆円覚寺や他の施設復元についても専門委員会の設置・検討が必要。</p> <p>◆首里杜構想はやり残したことが多い。国・県・市が上手くつながったまちづくりが大切。まち並みを見ていくと歴史・文化を感じ、体感できる基盤整備が、歴史的まちづくりだ。</p> <p>◆基本計画や新・首里杜構想の実現には、那覇市のまちづくりが連動することが不可欠であり、体制づくりが必要。</p>	<p>①中城御殿や円覚寺などの歴史文化遺産の整備</p> <p>②御茶屋御殿等の地域に点在する文化資源の段階的整備に向けた那覇市、県、国における連携</p>	<p>●首里城公園等の段階的整備に関し、県の取組はどうあるべきか。</p>
		(3) 交通環境の整備	<p>◆交通環境については、どういった姿を求めるのか、ビジョンはどうか、地域住民と観光客が共存できる形で描くことが大切。</p> <p>◆各種データを提示した上で議論を進めることが必要。</p> <p>◆道路の電柱も議論する必要がある。</p> <p>◆交通環境は、高齢化の進行や未来へつなぐ子どもたちへの視点から、地域に暮らす住民の福祉を踏まえる必要がある。</p> <p>◆交通環境の整備に当たっては、高齢者など様々な利用者への配慮やレンタカーや駐車場問題等の課題があるが、できるだけ理想を掲げてこれに近づけていくことが大切。</p> <p>◆新しい時代の交通環境を考えなければならない。基本は歩行だが、交通の拠点はどうするか、ネットワークする交通手段は何か。小スケールで新たなカタチの公共交通機関が必要。</p>	<p>①安全で快適な歩行空間の整備等</p> <p>②交通問題への対応</p>	

## 首里城復興基本計画策定に向けた施策の方向性の論点

	基本施策	施策展開	これまでの懇談会等における委員の主な意見	施策の方向性	議論の焦点
7	歴史の継承と資産としての活用	(1) 多様で魅力ある観光資源の活用	<p>◆伝統的な産業のアピールもしながら、復興の状態を県内外に発信する工夫が必要。</p> <p>◆現状の首里城から周辺へ誘導する仕掛けが大切。</p>	①歴史や伝統産業などの観光資源化	<p>●歴史・文化の継承に向けて、首里城の復興過程や地域の潜在的な魅力を活用した歴史・文化を「観て楽しみ、学ぶ」ことに関し、県の取組はどうあるべきか。</p> <p>(基本施策2及び4に関連)</p>
		(2) 平和を希求する「沖縄のこころ」の発信	<p>◆県外からは、首里城＝沖縄と感じており、観光にも大きな影響を与えている。また、意外にも「壕」もよく見ており、このような視点を踏まえて、首里城を中心に散策して回れる仕掛け作りが重要。</p> <p>◆首里城そのものが戦跡であり、琉球の歴史・文化的な晴れの遺産もあれば、負の遺産もあることも踏まえ、首里城を中心に広がりのある空間と捉えて新・首里杜構想のイメージを作ることが大切。</p>	① 歴史的価値を継承するための環境整備	
		(3) 次世代を担う子どもたちへの継承	<p>◆普及という面からは鑑賞機会を提供するのに加えて触れる、という位置づけも大事であり、教育の現場とも連携する必要がある。</p> <p>◆授業の中で組踊を鑑賞する、伝統工芸品に触れるなど、子どもたちが親しみをもてるような仕組みも必要。</p>	① 歴史・文化を観て学び、体感できる環境の整備	
8	琉球文化のルネサンス	(1) 多様性・独自性を持つ琉球文化の再認識	<p>◆文化を首里城の復興とどう結びつけて考えていくのが課題。</p> <p>◆宮廷芸能、古典芸能の発祥地は首里城であり、首里城復興は関係者が己を見つめ直すきっかけになる。芸能に携わる人のサポート体制の充実が必要。</p>	<p>① 伝統芸能や伝統工芸に触れる機会の提供</p> <p>② 琉球文化を見つめ直す日の制定</p>	<p>●首里城を中心としつつも、多用性・独自性のある各地の文化等の価値を再認識し、その魅力を普及・継承していくことに関し、県の取組はどうあるべきか。</p> <p>●琉球文化を体感でき、感動体験の機会送出の拠点とするための首里城公園の活用に関し、県の取組はどうあるべきか。</p> <p>●首里城を中心とした文化の再認識を基層とした新たな文化創造及び産業化に関し、県の取組はどうあるべきか。</p>
		(2) 琉球文化の復興と新たな文化の創出	<p>◆首里城を活用して芸能を発信する。これを始まりとして次のステップにつなげ、琉球文化ルネサンスを位置づけことが大切。</p> <p>◆伝統芸能を発信する環境は整ってきているが、全体的な課題として身につける物への配慮がまだ足りないと感じる。首里城では実物の染め織りを身につけて質の高い芸能を発信。このためには演じる側と工芸分野との連携が必要。</p> <p>◆文化の振興は、縦割りで無く、各主体と連動しながら、伝統文化をどのように保護し、発展させるかという取組が必要。</p>	① 感動体験の機会を創出する拠点づくり	
		(3) 国内外へ向けた琉球文化の発信	<p>◆文化（工芸）では収入が厳しく、技術を有していても業の継続が困難で、文化と経済のバランスをどう取るかがポイント。</p> <p>◆首里城は、工芸品の売上げが多くあった場所。</p> <p>◆文化を消費する経済でなく、文化を育むためにどうやって経済を回していくかの仕組みが必要。</p>	<p>① 県外公演・海外公演への派遣支援</p> <p>② 在外沖縄関連資料の展示公開</p> <p>③ 「日本遺産」のストーリーとしての発信</p>	
		(4) 琉球文化を活用した産業振興	<p>◆首里城という歴史・文化的に深く、広がりを持った世界をどう見せていくのが課題。焼き物、芸能など単体で無く、構造的に捉えることで新しい価値が生まれてくるのではないか。</p> <p>◆琉球文化のルネサンスを考えると3つのポイントがある。1つはオープンにすること。文化の人たちはクローズのイメージがある。もう一つが「多様性」。工芸の中でもなかなか横のつながりがなかったりする。新しい文化を創造するにあたっては文化を担当している人だけでなく、IT業界など異業種と交流することも必要。3つめは継続性。他の産業と違い、文化に関しては時間がかかるため、長いスパンで物事を見て、方針と計画を出していく必要がある。</p>	<p>① 文化資源を有効活用したビジネスモデルの創出や商品開発</p> <p>② 「おきなわ工芸の杜」を拠点とした工芸産業の支援</p>	

## 首里城復興基本計画策定に向けた施策の方向性の論点

	基本施策	施策展開	これまでの懇談会等における委員の主な意見	施策の方向性	議論の焦点
	基本計画の着実な推進	(1) 国、那覇市等関係機関との連携	<p>◆基本方針に掲げた事項（財源の確保、様々な意見の聴取、学術ネットワークとの連携）を踏まえ、計画策定に生かすことが重要。</p> <p>◆県の予算措置、あるいは国のバックアップを受けながら財源の確保が必要。</p> <p>◆県内外から支援金を継続して集めていく取組も必要。</p>	<p>①役割分担の明確化と連携体制の構築</p> <p>②復興財源の確保</p>	<p>●基本施策ごとに、国、県、那覇市、大学等高等教育・研究機関及び関係団体等が連携して、各基本施策を効果的に推進していく体制に関し、県の取組はどうあるべきか。</p>
		(2) 国内外の学術ネットワークとの連携		<p>①琉球大学・県立芸術大学等高等教育・研究機関との連携体制の構築</p>	
		(3) 県民等の継続的な参加による復興		<p>①県民等による参画機会の確保</p> <p>②関係機関の取組が連携の仕組みづくり</p>	